

占領期日本の米国人観光における「戦後日本」へのまなざし

北海道大学大学院 遠藤理一

1 報告の背景および目的

占領期日本（1945-52）の文化現象について、これまで「占領期が日本の人々にとって何であったか」という論点から、「アメリカ」という優越的な他者が持ち込む文化に日本人がどのように向き合ってきたのかが探られてきた（思想の科学研究会 1972; 吉見 2007）。その一方で青木深が指摘するように、日本全土に駐留した進駐軍兵士たちの日常的実践や日本社会との出会いのあり方については、これまで十分に議論されてこなかった（青木 2013）。しかし進駐軍兵士らのまなざしや言説に着目し、それが日本社会においてどのような文化現象を生んだのかを探ることは、「日本文化」への禁止政策を行う抑圧的な「アメリカ」という構図を問い直し、占領期における文化再編のダイナミズムを提起するのではないだろうか（江藤 1989）。そこで本報告では、占領期に日本に滞在した兵士や軍属、ジャーナリストによる観光旅行を通じた「日本文化」をめぐる語り注目し、その言説が日本社会へ与えた影響を分析することで、占領期日米の文化的関係を再考することを目的とする。

2 方法

進駐軍兵士らの言説の影響力について、称賛、許容や禁止などの様々な語りのモードを通じて、何が「戦後」にふさわしい「日本文化」であるか/ないかの枠組み自体を構築する力であると考え。そして第一に彼らがどのような都市、観光地、農村の風景や人々のふるまいを称賛、許容し、何を非難したのかについて、新聞（『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』）、雑誌（『旅』）のインタビューや寄稿記事、翻訳出版された旅行記から探っていく。第二に進駐軍兵士らの「日本文化」をめぐる言説がどのように国土開発、文化事業や観光事業へ影響したのかについて、上記の新聞、雑誌（『旅』、『観光』、『国際観光情報』）、国会議事録から探る。

3 結論

進駐軍兵士やジャーナリストの旅行体験や「日本文化」をめぐる発言は新聞・雑誌で頻繁に取り上げられ、旅行記はすぐに翻訳された。彼らは京都、鎌倉や農村の「伝統的」な美しさを称賛する一方で、都市の焼け跡や闇市、景勝地での耕作、交通インフラ、宿泊設備の衛生を非難した。国土開発、文化事業や観光事業に携わる日本政府や観光業者は進駐軍兵士らの発言に注目しており、彼らが称賛したものを開発・保存し非難したものを改革・隠蔽することが、戦後復興を共通の目標とする各事業の指針となった状況がみられる。進駐軍兵士らの観光旅行とそれを通じた言説に着目したとき、「アメリカ」の「日本文化」への影響力は従来議論されてきた禁止による抑圧的な性質だけではなく、何が「戦後」にふさわしい「日本文化」であるか/ないかの枠組み自体を規定する効果を持ったと考えられる。

参考文献

- 青木深, 2013, 『めぐりあうものたちの群像——戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958』 大月書店。
江藤淳, 1989, 『閉ざされた言語空間——占領軍の検閲と戦後日本』 文藝春秋。
思想の科学研究会編, 1972, 『共同研究日本占領』 徳間書店。
吉見俊哉, 2007, 『親米と反米——戦後日本の政治的無意識』 岩波書店。